



# Vision

## 今再び、「生理学」について

自然科学研究機構生理学研究所

伊 佐 正

自分の専門を書く欄があると「神経生理学」と書くことにしている。私は「神経生理学者」。それ以上でもそれ以下の何者でもない。「生理学」については既にこの欄で、もう長きにわたり多くの先輩方によって語られており、既に語り尽くされた感もあるが、私も一言、述べないわけにはいかない。

生理学研究所にいますと、最近よく「研究所の名前を変えてはどうか?」と言われる。もう30年もやってきたのだから、そろそろ「生理学」などという古臭い名前はやめてもう少し「今風」にせよ、ということなのだろうか。しかし、このような話について、ある席で遺伝研の先生とお話する機会があった際に、「そちらではこういう、名前を変える、なんていう話は無いのですか?」と尋ねると、あちらはあちらで「『遺伝学』なんて古いから『遺伝子学研究所』に変えてはどうか?」と言われたこともあったそう。しかし、時代が一巡りしてしまうと、やはり「遺伝子」は研究対象のひとつの要素にしか過ぎず、学問としての名前はやはり「遺伝学」なのだ、という話になってきているとのこと。確かに、我々の研究分野でも80年代の遺伝子クローニング、90年代の遺伝子改変マウスの時代を経て、2000年代に入ってからもう、遺伝子を見つけただけでは駄目で、生理機能をきちんと明らかにしないと分子生物学の論文も良いジャーナルに通らなくなってきている。つまり既に時代はとっくに一巡りして、「生理学」の時代になって

いる、はずである。しかし、実際には今が私自身も含めた「生理学者」の時代になっていると言いはないし、「生理学会」や「生理学教室」の時代になっていると実感している人はあまりいないのではないかと、思う。それが、私たちの能力不足によるのか戦略の欠如によるのか、いずれにしても「生理学者」は猛省しなくてはならない。

本来「生理学」は「物理学」と対峙する、ないしは一部に物理学すら含有するような学問の体系であるはずである。類似している名前としては「生物学」や「生命科学」などがあるが、そもそも「生物学」とは対象の範囲がだいぶ異なるし、「生命科学」なんてまだまだ言葉としてこなれておらず「仕組みを考える生理学」の持つメッセージ性に比べるとやはり軽い。ただ、この「生理学」が「解剖学」「生化学」「薬理学」「免疫学」などと横並びで、主に研究手法に基づく分類で医学教育におけるひとつの「科目名」になってしまっているのは、学問としては不幸なことだったのかもしれない。(勿論医学教育の運営、科学研究費の分配などの現実的な諸問題は理解しているつもりだが…) 昨今、多くの大学で基礎医学系講座が直面している困難な状況に対して、少し乱暴かもしれないが、いっそのこと基礎医学系が「生理学者」のイニシアチブによって「生理学」ないしはそれに類する名のもとにアイデンティティを確立するくらいのことがあっても良いのだが、こういうことは、現状ではやぶへびになるだけかもしれないし、そもそも

私たち「生理学者」が自分で言い出しても嫌われるだけのことで、他の分野の研究者から言ってもらえるような、そういうレスペクトを「生理学」が獲得してはいけない。そのためには人材育成や我々自身の足腰の強さの強化など、多くの課題があり、一朝一夕には行かないのかもしれない。しかし、「生理学者」としてはそれくらいの気概と、それを現実のものとするための戦略は持ちたいものである。

話は戻るが「生理学研究所」の名前の問題が生じるのは当然ながら「脳科学」との関係においてである。本来は身体があつての脳であり、脳は身

体を有することでその機能を発揮できる。従って、もし、「生理学」が身体の機能を包括的に扱う総合科学として位置づけられるのであれば、「生理学研究所」において脳科学の研究が行われている、というのは意味のあることである。しかし、「生理学」が「解剖学」や「生化学」などと横並びの学問のひとつのカテゴリーに過ぎないのであれば、人文・社会科学をも巻き込む総合科学としての広がりを急速に見せている現代の「脳科学」の勢いに抗するのは容易ではない。我々の「生理学」の足腰が今、試されている。